

## TTC DSL 専門委員会スペクトル管理サブワーキンググループ

---

日付：2004年1月29日

提出元：イー・アクセス株式会社<sup>1</sup>

題名：【提案】フィールド実装に対応したスペクトル適合性の確認手法について

---

本寄書では、機器の実装内容まで含めてスペクトル適合性を確認するための新たなクライテリアを追加提案したい。

### 1 現状の確認手法とフィールド実装上との乖離

現在、スペクトル管理SWGでは、1の伝送システムについて5kmまでのスペクトル適合性を確認し、JJ100.01もしくはスペクトル適合性確認結果報告書に1の伝送システムごとに記載している。

一方で、フィールド導入を行なう場合、機器の実装上においては、ADSL利用者へ最大限のメリットが出るように線路長の遠近に伴って、伝送システムを切替えている。よって、適合性確認結果と実装状況が一對一に対応しておらず、実際には使用していない線路長まで適合性が評価されているケースがある。

### 2 実装内容に対応した新たな確認手法の提案

伝送システムの選択アルゴリズムを日本ローカル仕様としてTTCにおいて標準化することによって、線路長制限の扱いを変更することを提案したい。

具体的には、イニシャライズ中に線路長を測定するアルゴリズムを規定して、測定した線路長に対しスペクトル適合性が確認された伝送システムのみを使用する手法である。これは、線路長をベースに性能及び安定性を考慮して最適なADSLシステムを選択することが出来る。(但し、線路長制限を超えるシステムからは選択しない)。

なお、イニシャライズ中に線路長を測定することが不可能もしくは不要な伝送システムに対しては「引き続き」JJ100.01第2版で規定されている方法でスペクトル適合性確認を行うことで良い。

### 3 今後の検討

スペクトル仕様SWGで、NTT東西殿の線路データを用い妥当性を検証しながら、伝送システムの切替え手法の仕様化をおこないたい。

その前提として、まずはスペクトル管理SWGで本検討の開始について合意を得たいと考える。その後、仕様検討については仕様検討SWGにおいて検討を進め、TTC標準として標準化をおこないたい。

以上

---

<sup>1</sup> イー・アクセス株式会社

小畑 至弘 [obata@eaccess.net](mailto:obata@eaccess.net) 藤田 敬史 [keishi@eaccess.net](mailto:keishi@eaccess.net) 大橋 功 [iohashi@eaccess.net](mailto:iohashi@eaccess.net)